



坂町道徳作文コンクール入選者決定

町内在住の小学5年生から中学3年生を対象に、「道徳」に関する作文を募集したところ、多数の応募があり、厳選なる審査の結果、入選者が決定しました。特選作品を順次、掲載します。今後とも、道徳心の向上に心がけ、地域・国際社会に貢献できる主体性のある「坂町っ子」となれますよう期待します。

特選（6作品）

- 小学校5年の部
平澤 晴（坂小学校）
植田 航（横浜小学校）
- 小学校6年の部
増野 香帆（坂小学校）
- 中学校1年の部
木村 紗良（坂中学校）
- 中学校2年の部
山田 亜子（坂中学校）
- 中学校3年の部
渡瀬 羽南（坂中学校）

入選作品（19作品）

- 小学校5年の部
佐野 辰樹（坂小学校）
灘 翔真（小屋浦小学校）
坂本 優羽（小屋浦小学校）
- 小学校6年の部
川瀬 蒼太（坂小学校）
金広真由子（坂小学校）
大久保 律（横浜小学校）
渡部 寧心（小屋浦小学校）
- 中学校1年の部
政本 風太（坂中学校）
丸目 瑛太（坂中学校）
- 水戸 拓真（坂中学校）
吉原 綾汰（坂中学校）
- 中学校2年の部
埜 花音（坂中学校）
泉本菜の花（坂中学校）
大平 万尋（坂中学校）
田村 優（坂中学校）
- 中学校3年の部
濱井 美音（坂中学校）
平賀さくら（坂中学校）
三宅 恵都（坂中学校）
田下 翠（坂中学校）

特選作品

元気よく

坂小学校5年

平澤

晴

「おはよう。」
「1日のあいさつはいつもここからだ。ただ、5年生の私はまだできない。」
「おはよう。」と言われ、ただ頭を下げることも、たがせ一杯だ。
なぜ、言えないのだろうか。家を出る前には、毎日あんなに心がけているのに。
ある日の学校の帰り道のことだった。
「おかえり。気をつけてね。」近所の人が声をかけてくれた。
「ただいま。ありがとう。」言いたかったけど、言えなかった。
どうしてだろう。親切に声をかけてくれたのに。すぐ後かいた。本当はあいさつをしたい。だけど、あいさつするとなることができなかった。
あいさつされると（ど

うしよう。どうしよう。5年生にもなつてあいさつできないなんて変かな。また聞けないかも（かもしれない）。そんなことが頭の中をぐるぐる回り、気持ちもどきどきしてくる。
まだマスクをしていたころ、勇気を出してあいさつを返したつもりが聞こえていなかったことがあった。悲しかった。
無視されたわけではな、いのは分かっていて。でも、やっぱりもやもやした。
もともと声が小さいので、マスクを着けている分、いつもより大きな声で言わなくてはいけないけれど、私にはとても難しかった。
しかし、最近はどうも、マスクを着けていない。そんなある日、
「行ってらっしゃい。気をつけて行ってね。」と、声をかけてくれた。これまでの私だったら何も言えない。でも、この日はちがった。
「はい、行ってきます。」聞こえる声で返すことができた。元気よく言えた。

気持ちが良かった。心がすっきりした。
その時分かった。やればよかったんだということがいろいろ考えてはさしくなったり、きん張したりしていたけれど、ただ、言ってみればよかった。難しくなかった。
だから私は決めた。他のことでもチャレンジする心をもって、苦手なことも少しずつ積み重ね、クラス1になるようにがんばろうと。
このことをきかっけに、学校でも手を挙げられるようになってきた。
これまで、あたらな、いいなどおそろおそろ手を挙げていた。しかし、今は（間ちがっていいや。）と思えるようになってきた。
そんなふうに見えるようになってくると、今までできなかったことが信じられなくらいにできるようになってきた。
私の家は、かわ細工の教室をしている。学校から帰ると生徒さんが来ている。私の知らない人もいる。



以前は、玄関に知らない人のくつがあるだけ、きん張して、「おかえり。」
と言われても、お母さん以外の人には返事が出来なかつた。でも今は、「ただいま。」
と返事もできるし、「学校どうだった。」
と聞かれても、ちゃんと自分の言葉で説明できるようにになった。
私は、あいさつができるようになったことで、おたがいが笑顔になれることを知った。そして、他のことにもチャレンジする勇気をもてるようになった。
小さい子でも、あいさつはできる。とても簡単そうに思える。だけど、私にとってはとても勇気のいることだった。



この経験は私の大切な宝物で、私も少し成長できたのかなと思うと、うれしい気持ちになった。
「未来に残そう
美しい喜界島の海」
横浜小学校5年
植田 航

ぼくは、夏休みに鹿児島県の喜界島に行きました。喜界島は、奄美群島にある小さな離島で、サングラうでできた海が、とてもきれいな島です。ぼくたちの住む広島県からは、車や飛行機などを利用して約8時間かかる。とても遠い場所にあります。喜界島には、ぼくのおじいちゃんの家があります。おじいちゃんの家は、近くに、きれいなビーチが広がっています。ぼくは釣りをすることが好きで、広島でもよく釣りに行くのですが、喜界島の海には、カラフルな南国の魚や、広島では見ることがない魚、ウミヘビやウツボ、オニダルマオコゼなどの危険生物と言われる生き物がたくさん生息しています。

また、喜界島のビーチは、白い砂浜やすき通る海がとてもきれいです。

ウミガメの産卵地にもなつていて、夏には産卵の様子を見ることができ、ビーチもありません。海は、まわりがサングラうに囲まれているのでとてもおだやかで、すき通った海の中には熱帯魚を見ることもできます。
そんな魅力いっぱい喜界島の海で、ぼくは夏の夏、見つけた物がありました。それは、ビーチに広がるたくさんのゴミです。ペットボトルやプラスチックなどのゴミがたくさん落ちていたのです。そのゴミの多くは、喜界島に遊びに来た観光客が捨てて帰った物だそうなんです。ぼくは、その光景を見て、とても残念な気持ちになりました。自然豊かな喜界島が、ぼくたち人間の手で汚されていることがとてもショックでした。また、このままでは魚たちの住み家がなくなり、島に暮らす生き物たちが減ってしまうのではないかと心配になりました。ぼくは、美しい喜界島の海を守るためには、自分が

出したゴミは自分で持ち帰るなど、一人一人がきまりを守り、美しい海を守るという意識をもつことが大切ではないかと思えました。
また、喜界島には東日本大しんさいで東北地方から流されてきた船が漂着しているという話を聞きました。その船を展示している場所が喜界島にはあるそうです。そんな遠くから大きな船が流れ着いたなんて信じられず、とてもおどろきました。
ぼくは、この船と同じように、海にゴミを捨てると、そのゴミは長い時間をかけて広い海をわた、遠く離れた海岸に流れ着いていくのではないかと考えました。つまり、自分たちの身近な海を汚すことは、世界中の海を汚すことにつながっているのではないかと、自分たちの身近な海をきれいにすることは、遠く離れた海をきれいにすることに繋がります。喜界島には、海以外に

もムラサキオカヤドカリや、オオゴマダラといった多くの生き物が生息しています。そんな自然がすてきな喜界島をはじめ、世界の海がこれからは、きれいであるために、ぼくは、まず自分自身ができることから始めていき、いと思ひます。海にゴミを捨てないのはもちろんのこと、進んでゴミ拾いに取り組むぼくの姿を見て、周りの人も海について考えてほしいなと思ひます。そして、改めて今ぼくの住んでいる坂の海も見つめ直してみたいと思ひます。
ぼくたちが大人になった時に、今よりもっときれいな喜界島の海を見ることが、ぼくは今からとても楽しみだと思ひます。

